9

鍵盤に魔法を

調律師 鈴木均が語る

# 電気文化会館の登場 転機に

修業時代 ❸

家庭用ピアノの仕事をしながら演奏会の調律を学ぶうち、1986年に名古屋に電気文化会館（ザ・コンサートホール）ができたことがターニングポイントになりました。

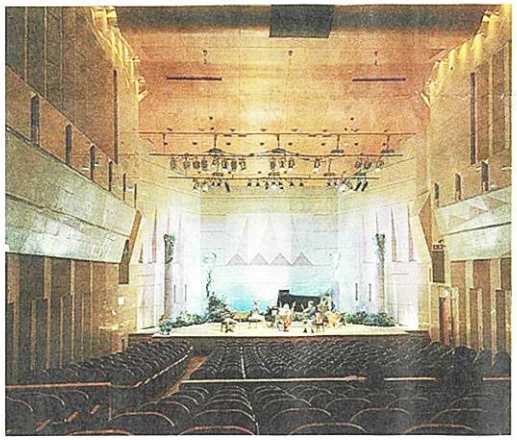
公立のホールの場合、利用者が調律師を連れてくるのが一般的でした。ふだんコンサートピアノなど触っていない調律師がほとんどで、当時の名古屋のピアノは東京の音楽業界で評判が悪かったそうです。その点、電気文化会館は中部電力が建てた民間ホールです。音楽に理解のある支配人がいたこともあり、専任の調律師で演奏会用のピアノの状態を維持しながら、ピアニストの要求にも応えていこうという方針になったそうです。そこへ研修を受けていた輸入商社から僕が推薦され、もう一社と一緒に専属として仕事をすることになったのです。

大阪にザ・シンフォニーホールはありましたが、電気文化会館はサントリーホールよりも先に、当時の日本では珍しいコンサート専用ホールとしてできた建物です。地下に造るのも前例がなく、防火の面から内壁に木材が使えず大理石になったと聞きました。

当時演奏会場として当たり前だった多目的ホールでは、舞台の反響板が隙間だらけで遠くへ音が飛びません。そんな舞台に慣れた地元ピアニストが「こんなお風呂場みたいに響くホールじゃ、とても演奏できないわ」と言って別のホールへ変更したこともありました。でもそれは弾き方の問題であって、タッチ、ペダリングなどで響きをコントロールできる外国の著名なピアニストからは「グッドホール、グッドピアノ」と称賛されました。

明治の頃の日本人が、チーズや肉をなかなか食べられなかったことと同じではないでしょうか。やかましい演奏もあれば、うっとりするような演奏会もある。そんな時期がしばらく続きましたが、遠からず「ここで演奏したい」という人が増えると確信しました。

（聞き手・南拡大朗）



大理石で囲まれた電気文化会館ザ・コンサートホール

中日新聞朝刊 2024.10.26 掲載記事より